

日本文学会誌（第二十八号）抜刷  
二〇一六年三月十五日 発行

松代藩第六代藩主真田幸弘の遊び心

平林香織

# 松代藩第六代藩主真田幸弘の遊び心

平林香織

## 一 はじめに

長野市松代町の真田宝物館には、松代藩真田家代々の関連史料が保存されている。本稿では第六代藩主真田幸弘を取り上げる。幸弘は元文五年（一七四〇）松代で生まれ、宝暦二年（一七五二・一三歳）から寛政一〇年（一七九八・五九歳）まで、四六年の長きにわたって藩主の座にあった。文化一二年（一八一五）江戸で死去している。享年七六歳である。幸弘の肖像画は真田家菩提寺長国寺（松代町）に伝来し、宝物館にはない。その代わり、虎頭の衣冠束帯図が伝来する。親しみをこめてタイガーマスクと呼ばれている（画像参照）。箱書には「幸弘御生年甲乙七ツ目虎之図」とある。制作年代不詳である。



七ツ目虎之図（真田宝物館画像提供）

『日本国語大辞典』によると「七ツ目」とは「七ツ目の干支」の略であり、「七ツ目の干支」の項には次のように書かれる<sup>(1)</sup>。

自分の干支から数えて七番目にあたる干支。「子と午」「丑と未」のように組み合わせが一定してお

松代藩第六代藩主真田幸弘の遊び心（平林）

り、これを絵にして身近に置くと幸運を招くと信じられていた。七つ目。

幸弘は庚申かのえさるの生まれだから、申から数えて七つ目の

干支は「寅」である。幸弘は、なぜ、虎そのものの絵ではなく、自分の顔を虎にしたのだろうか。彼はこの絵にどんな思いを込めたのか。どんな幸運を招きよせようとしていたのだろうか。本稿では、そのことを、幸弘の治世・処世の面や干支の特徴の面から考え、この虎図に幸弘の為政者としての「遊び心」読み取ってみたい。

まずは、幸弘の治世がどのようなものであったかを簡単に確認しておこう。

## 二 幸弘の文治政策

真田家は、第三代真田信之の時代、元和八年（一六二二）、上田から松代に移封された。よく知られているように、関ヶ原の合戦の折、父・昌幸（真田家第二代）と次男・信繁（幸村）は西軍に、長男・信之は東軍につ

き、父子・兄弟が敵味方に分かれて戦った。信之は「信幸」であったが、父との縁を断つために「幸」を「之」に改めた。このときの英断によって、真田家は十代に及んで松代領を治め続けることができた。このことは、江戸時代から現代にいたるまで語り継がれている。川柳にも、「六文の兄弟忠と義に別れ」（誹風柳多留）、「兄弟で身ごろを分ける真田縞」（同前）、「兄弟を敵と味方にする親二」（雨の落ち葉）などと詠まれているし、繰り返し歴史小説の題材となっている。

幸弘が藩主だった頃、どの藩も、天災被害・冷害による凶作と、江戸参府費用・藩邸維持費・土木関係の御用事業費抛出等による出費の増大により、財政難に陥っていた。松代藩でも信之が残した莫大な遺産も底をつき、天和三年（一六八三）日光大地震による東照宮修復、宝永四年（一七〇七）富士山噴火による東海道旅宿・堤防復旧、正徳元年（一七一）朝鮮通信使饗応（浅草寺）と巨額の抛出が続いて財政は逼迫し、国元では千曲川の氾濫が頻発し、領民は疲弊していた。幸弘が、父・第五代藩主信安の早逝により一三歳で家督を継いだとき、財

政立て直しは喫緊の課題だった。

幸弘は、宝暦七年（一七五七）一八歳のとき、藩政改革の担い手として恩田木工守民親を勝手係に登用した。恩田は、宝暦の改革として、年貢の月割上納制、俵約の徹底、浪人・旅芸人の止宿禁止、文武奨励などを断行した。恩田の財政改革については『日暮硯（異本・鳥籠の山彦）』（写本・作者成立年不詳）に詳しい。『日暮硯』は物語仕立てで名君としての幸弘公の言動を礼賛する。書かれていることすべてが事実であるとは限らないが、幸弘治世に近い頃に書かれたものと思われる。

『日暮硯』には、厳しい節約と合理的な税の取立て方法を実施する恩田が、文武を奨励しつつ遊芸や博奕を禁ずることがなかったとある。宝物館に伝来する『日暮硯』の異本『鳥籠の山彦』には次のように書かれる。

此末随分家業油断無く出精致すべきは、申す迄もなけれども、家業にうとく、そりやく鹿略成るものは、天下の罪人也。家業に出精して其余分あらば、分限相應に、楽しみはいかようなり共苦しからず候間仕るべし。

く、碁将棋双六謡曲俳諧、扱は浄瑠璃三味線の類なぐさみにならば博奕なり共、好みたる事をして楽しむがよし、さりながら博奕は天下の御法度なれば商売にはなすべからず、もし商売にする者あらば急度きつと曲事（＝処罰）申し付け候間、此旨能々申し聞かせて慰みにのみ致すべし。惣じて人は分限相應にたのしみがなくては、精を出しても面白からぬもの也。之により楽しみはすべし。精は出すべし。其上第一に神仏を信仰する心なき者は、災難多きものなり。之により神仏を信じて現当（＝この世とあの世）を祈るべし。

家業に精を出すのであれば、分限相應の楽しみとして、囲碁将棋、双六、俳諧、謡曲、音曲、さらには、博奕であつても、好きなことをして楽しむようにと言ひ渡している。「天下の御法度」である博奕を、金儲けのためではなく楽しみとして行うのであればかまわないといふのである。神仏への信仰心を前提として、「楽しみはすべし。精は出すべし」と物心のゆとりを大切にした考

え方で政治が行われていたことがわかる。

やがて、改革が進むと「領内の風儀も自然改まり」盗人などいなくなったと書かれる。恩田自ら質素儉約を實踐、武芸・学問に精励し、神仏への信仰が厚く、「殿へも治世乱世共に文武の両道は、武士たる者の常のたしなみにて御座候へば、片時も怠り給ふべからず」と提言したという。その結果、次のように家中の雰囲気が刷新されたと書かれる。

之より、上の好むところ下又此の如く、松代の御家中は幼少の子供等迄も誰教ふるとなしに文武両道をはげみ、制せねども悪事を働くものなければ、自ら御家中も裕福になり、君の御身代もたちまち立直り、五ケ年も立たぬうちに大分御金も出来、御領分へも利安にて拝借金など出し候故、自然と御領分も豊かに成り、諸人安樂に暮しけるとなり。（中略）  
明け六ツより夜四ツ時迄色々稽古、品替れば退屈もせず、皆々出精專一とす。之より一家中は子供迄も諸芸に達したる人多しとかや、されば博奕などは赦

され居れど、左様な事をする隙に外の稽古せねば、辱かしめをうける故、誰制せねど自然と止み、御家中に不益の物入ものいりなく、奢がましき事なく、諸芸をのみ心掛る故、盗をする者、殿の目を掠める者なしとなり。

誇張された表現かもしれないが、恩田が重要視した施策のひとつに学問奨励があつたことは確かだろう。学問による意識改革によって、人々に何が重要で何が不要であるかを判断する力を身につけさせた。その結果、上からの命令によるのではなく、自主的に行動を律する態度が浸透していき、言われなくても贅沢をしたり盗みをはたらいたり、不正を行ったりするものが居なくなったという。

このような考え方は、松代藩が出した家中への文武奨励の触れ書のことばにも表れている。

松代藩『日記繰出』<sup>③</sup>によると、幸弘時代には一三回の武芸および学問奨励のための藩令が出されていた。その主なものは次のとおりである。

○宝暦三年（一七五三）七月

向後御家中之武芸折節可被遊 御覽旨、且 御入部迄は家老共一ヶ年三度ツツ可致一覽旨相触

○宝暦八年（一七五八）一〇月

御家中諸士武芸為出精、向後大御門外御用屋敷之内稽古所御借被成下候間、申合稽古日立罷出候様相触御家中諸士之内武芸令懈怠遊芸を專に好候者も相聞不埒付、自今於相聞は可被及び御沙汰旨演說申渡御家中之面々儒学講談承度面々ハ菊池千藏方江罷出承候様被 仰出

○宝暦一四年（一七六四）三月

文武出精候様御家中江被 仰出

○安永六年（一七七六）五月

武術・学問等無懈怠出精心懸宣者も相聞候得供、大勢之内ニは不精之者有之付 一芸たりとも達 御聴程之儀相嗜候様被 仰出演說

○天明七年（一七八七）八月

文武之道并文学・軍学・天文学其外芸術当時致出精

候者免許目録等得者、名前・年齢等書出候様從 公義 仰出相触之

幸弘が家督を相続した翌年の宝暦三年（一七五三）には、幸弘が松代に入部の際は「家中之武芸」をご覧になるから、それまでは家老が年に三度ずつ藩士たちの武芸のようすを一覧すると発令されている。ここでは「武芸」が奨励されているだけで、学問や文事には触れられていない。幸弘が藩主就任後松代に初めて入部するのは宝暦六年（一七五六）、一七歳のときである。

幸弘以前には、貞享四年（一六八七）三月に「諸士武芸心掛武具随分量相嗜候様被 仰出」、元文三年（一七三八）九月に「軍法弓鎗・兵法・乗馬指南并稽古之儀付被仰出有之」と、武芸の稽古が奨励されているだけだ。

しかし、宝暦七年（一七五七）に恩田が勝手係に登用された翌年一〇月に「大御門外御用屋敷内」すなわち江戸藩邸内の稽古所に日を決めて出頭せよとの触れが出される。武芸を怠り、遊芸ばかりするものは「不埒」であり、「儒学講談」を学びたいのであれば菊池千藏（南

陽）のもとに行くようにと沙汰している。

菊池南陽は林鳳岡門の朱子学派で、江戸藩邸の評定所長屋を漢学文学館（学問所）として、月並講釈を行ったという。<sup>(4)</sup> 生没年は未詳である。「武」に「文」が加わっている。井上敏幸によると、諸藩が重要視した文武の「文」とは、儒教思想のことであるという。<sup>(5)</sup> 宝暦一四年（一六八四）にも「文武」に精を出すようにとの発令がある。

ところが安永六年（一七七六）には「武術・学問」ということが用いられている。そして幸弘治世三五年目に相当する天明七年（一七八七）には、「文武之道」と並んで、「文学・軍学・天文学其外芸術」に精を出し免許を得ているものは名乗り出よという触れが出ている。文武の範囲がぐっと広がり、文学と天文学、軍学が併記されている。天文学や軍学には、今日でいう数学・化学・物理の要素が含まれる。また、芸術全体に秀でたものが広範な学問と芸術であるという考えが示されている。そして、それは、幸弘が、大島蓼太や峽田菊堂らの俳諧宗匠や米翁（大和郡山第二代藩主柳沢信鴻）と交流して点取俳諧に

興じたり、堂上歌人・日野資枝に和歌入門を果たしたりして、文人大名としての活動を展開してきたことと関係するだろう。ことに多くの俳諧宗匠や他家の大名・高家・藩士・儒医などと一座する点取俳諧活動を江戸藩邸でも国元でも活発に行い、点者としても活躍した大名俳人であったことは江戸時代から周知のことであった。<sup>(6)</sup>

幸弘致仕後には文武奨励の触れは一回しか出ていない。財政再建や教育には長い時間が必要である。恩田は、六年後、改革半ばにして病のため没するが、幸弘は、その長い治世を通じて、儒教をはじめとする文理にわたる学問を重視する文治政策を推し進めた藩主だった。

また、松代藩『日記繰出』で儉約令をみると、幸弘以前には、延宝三年（一七五三）の「飢饉付儉約被仰出」という儉約令を嚆矢として、延享二年（一七七五）までの間に二〇回儉約令が出されていることがわかる。およそ一年に一回のペースである。一方、幸弘時代の宝暦三年（一七五三）から天明八年（一七八三）の三〇年間は、九七回の儉約令が出されている。年に三回以上の割合である。

当時、諸藩の中興の祖と言われる藩主たちは軒並み儉約・殖産興業・文武奨励を行っていたから、幸弘もそれらを参考にしながら藩政改革を推進したのかもしれない。

教育振興や財政再建には、藩政執行部の意識改革や人材刷新を行いながら、徳川家の意向をもさぐる不断の努力と知恵が必要である。幸弘は、時流を読みながら、心身の健康を保ち、好学の藩士に補佐された藩主であった。そして、点取俳諧を通じて彼ら藩士のみならず江戸庶民や領民とも身分を超えて交流・情報収集した。しかし、世継問題が幸弘に大きくのしかかった。幸弘は知恵をしばって真田家の命脈を保つことになる。

### 三 真田家の世継問題

どの藩も一家の存続は最重要課題だった。疫学的遺伝的な問題も多く、どの藩でも、藩主に男子が生まれなかったり、男女ともに生まれても夭折したり、嫡子が心身の疾患を抱えていたりということが起った。嫡子不在の問題は、婚姻や養子縁組によって他家と縁戚関係をもつ

ことよって解決するしかない。その際、大切なのはどの藩とつながりをもつか、ということだった。

幸弘には男子がなかった。そこで天明五年（一七八五）彦根藩井伊家から養子を迎え、息女・三千姫との婚姻によって第七代藩主真田幸専ゆきたかを立てた。

ところが、幸専には男子も女子もなかった。では、どうするか。

幸弘は息女・峯姫を浜松藩主井上正甫まさもとに嫁がせていた。峯姫は病死していたが、その娘・雅姫、つまり自分の孫娘を、幸専の養女に迎えた。一方、幸弘の正室・真松院は白河藩第二代藩主松平定邦の妹だった。そこで、定邦の養子で第三代白河藩主の松平定信の次男・定栄さだながを幸専の養子とし、雅姫と定栄を結婚させて、定栄を幸専の世継とした（第八代藩主幸貫）。定信は、第八代將軍徳川吉宗の孫であり、老中首座として寛政の改革を推進めた政治手腕の持ち主である。諸大名への影響力は絶大だった。真田家にとってこの縁組は理想的なものだった。



松代藩第六代藩主真田幸弘の遊び心（平林）

この間の事情について定信が『花月日記』に次のように記している。<sup>(8)</sup>

文化九年九月一日

巳の刻過るころ、井上のかたへ行。こはめづらしといふらめ。家のおさにあひて、たゞちにかへる。老鶴のしわざなりかし。真田のむすめこ、へ嫁して、ひとりの女子をもちてうせ給ひぬるを、外にハうま子もなし。彈正忠、としよれど子なければ、この女子をやしなひて、わがかたの定栄を養子にせんとのことなり。井上いとむつかしくいひ給ひたるが、つゝに翁にたいして、そのこひにまかせなん、といふ。されども、年ごろいといひ難じたるハ皆々しれるを、こたびハ何の故もなくゆるしたらバ、初のゆるさざるハいかゞといふらめ、との給ふ。さらバ、いづかたへもゆかざる翁まいりて、真田のこふむねにしたまへかし、と家の長よび出ていひはべらん、といへバ、になふよろこび給ふ。十あまり三日にハ、真田よりつかひのものすれバ、そのまえへに行て、

かのひとのこゝろざしとげん、との事也。夕がた、次郎のそうしに行。

文化一〇年六月一日

朔日 くもる。わかきおのこも、かたびらのミきしハなし。まゐて、翁ハさらなり。氷室の氷出すとも、はへもあらじ、とわらひあふ。つな子、きたり給ふ。夕つかた、定永あそ、廿あまり八日に白川をたち給ひて、三日になんつき給ふ、といひこす。二日、三日の比と定りしかど、いかゞ哉とあんじものし侍りて、例の歌などよむにも心のとゞまらざるやうにミえしが、いよくあさてといふにぞ人々皆打よろこぼひて、さらバとて、盃にこぼる、斗うけてのむも、おかし。つな子もいさミてかへり給ふ。けふハ、松山の君の田安の姫君にゑんむすび給ひしも、松代の君が井上のむすめをやしなひ給ひしも、皆翁がはじめよりの力なりとて、酒さかな、どおり給ふも、おかし。こなたよりも、又さかな、ど。

文化九年九月一日の記事には、真田家の意向を井上家に伝えたとき、正甫は「むつかしくいひ給ひたる」とある。井上は乗り気でなかった。しかし定信の顔を立てて了解し、両家の婚儀が整ったのである。「真田のこふむね」ということばから、定信を動かした幸弘の思いの強さが伝わる。幸弘は一家のために甥に頭を下げたのだろう。一八歳年少であつても、定信の影響力がいかに大きいかを幸弘は知りつくしており、それを大いに利用したのである。文化一〇年六月一日の記事で定信は、自分の尽力によつて松代藩の縁組が整ったことに誇らしげである。頼み上手な伯父と頼りがいのある甥であつたことがわかる。

もうひとつ、幸弘が積極的に推し進めたことがある。官位を従五位下から従四位下に昇進させるための活動である。真田宝物館には「大手御門番半役他御入料金覚」という書付が残っている。第七代幸専時代のもので、幸専の昇進に二千両余、大殿（＝幸弘）のときは七千両余の費用がかつたとある。質素儉約を謳つた藩政改革の態度と矛盾する行いのようにも思われる。

この官位昇進は天明三年（一七八三）幸弘四四歳のときのことであるが、甥である松平定信が二六歳でやはり従五位下から従四位下に昇進したのと同じ年だった。翌天明四年（一七八四）定信は老中となり、天明七年（一七八七）から寛政五年（一七九三）まで老中首座を勤め、寛政の改革を推し進める。定信は『宇下人言』に「真田伊豆守四品になりしがこの物入は予に五六倍しけるとぞいふ」と書いている<sup>9</sup>。自分より四、五倍も金品を使つて昇進を果たしたことに驚嘆している。定信もまた、伯父幸弘のことを強く意識していたに違いない。

それにしても天明二年・天明の大飢饉（天明八年まで続く）による餓死者が続出し、天明三年・浅間山噴火により多数の犠牲者が出て降灰被害も広がるさなかのできごとである。社会的経済的に困難な時期に、四位昇進を果し、天明五年に井伊家から養子を迎えて嫡子とした幸弘には、吉事によつて領内の憂いを祓う願いがあつたのだろうか。

井上敏幸は、縁戚関係もある定信と同時に昇進を果たした幸弘が、文人大名としての在り方、大名の文事の根本

が歌道にあることなどを定信から学んでいたのだろうと推測する。<sup>(10)</sup>

幸弘が定信に養子縁組の件を頼み込んだのは文化九年（二八一二）、それが実現したのは、文化一二年（二八一五）、幸弘が亡くなる年である。幸弘は七六歳になっていた。従四位に昇進し、幸専を養子に迎えてから三〇年の歳月が流れている。大殿として世継問題を解決してほつとしたことだろう。

『花月日記』には幸弘の臨終間際の様子も綴られている。

文化一二年八月二日

南部坂へ行バ、上邸をばやめつ。辰の刻比に行たりしが、いと、よはり給ひて、喘氣のつきあハせかねたるけしきに、ねちハ根づよく、おさへミし手のそこ、とをるやうなり。翁のきたりしを、うれしとミやり給ひて、酒す、め奉れなど、ずさにいひ給ふ。柴胡の症とハ、ミゆれど、あるハ大柴胡といひ百虎といひて定まらず。たゞ清解する外に、せんか

たなかるべしといふハ、少しちかけれど、はや誤法になりて、表ハ湯明胃実の症なれども、初めの解熱おくれにけれバ、今にてハ手をつかねてミる外ハなし。是を解せんとせば、たゞに、うながすのミ。さるにて益氣のたぐひにハあらずや。こうやうの大患に至りて、実は薬の及ぶ所にハあらじ。深正の心にある事にてよそより、すゝめものすべきにあらねバ、今、名ある杉本仲温・服部宗賢などよび給へ、又それらに、とひものし給はゞなど、いひけり。頼神の甚しきハ老のやまひ也。又、近く来るべしとのミいひて、たちたるが、いといたう、はかなきさまにて、翁と、いとしたしく、ちぎりこめたる友にハあらねど、何ぞといへば、たのミ給ふにぞ、ねちなど盛にて、ほれ／＼とし給ふ中にも、必らず翁来り給ひしなど、夢にもミ給にしや、などいふ。いとあはれにかなし。こしのうちにも、只、そのミ思ひつゞけて、かへりぬ。

幸弘は、定信の来訪を喜んで、高熱にうなされながらも酒を進めるようにと従者に命じている。医学の知識もあつた定信は、病状を診断しながら手の施しようのない状態であると判断する。そして幸弘との間柄を「ちぎりこめたる友」ではなかったけれども、何かという自分頼りにしていた、と振り返る。高熱のなか「きつと定信が来てくれると信じて夢にまでみていた」などと言う幸弘の思いを「あはれにかなし」と受け止めている。

幸弘は定信に寄り添いながら、昇進し、世継問題を解決し、真田家を盛り立てて死んでいった。やがて定信の血を引いた第八代藩主幸貫が藩政改革をさらに推し進め、老中となり、真田家の家名をより一層あげていく。

#### 四 七つ目の干支

以上長々と幸弘の事績を述べてきたが、まとめると、幸弘には三つの顔があつたことがわかる。ひとつは、領内に文武を奨励し、儉約を旨とする政策を推し進める名君としての顔。そして、和歌活動や俳諧活動に熱心な文

人としての顔。さらに、真田家の栄光と存続のためになりふりかまわず奔走する策士としての顔。一見矛盾するかのような三つの顔であるが、そのどれもが七つ目の干支の肖像画に表れているのではないだろうか。

ようやく肖像画について考えるところまできた。

太田南畝『一話一言』<sup>(1)</sup>（安永八年（一七七九）～文政三年（一八二〇））巻一七「南畝莠言」<sup>（ゆうげん）</sup>には次のような記述がある。

世俗に、己が生れたるとしの十二支より七ツ目にあたれるものを、衣冠したるすがたに画が、せて祭れば出世するといへる事あり、もろこしにもこれに似たる事あり、竜頭雜字元龜大全の干支門にはく、十二支相冲類、子午相冲、寅申相冲、卯酉相冲、辰戌相冲、巳未相冲とあり、そのわけはしらねども、まさしく七ツめのゑとを相冲といふとはみへたり、方位のむかひあふ事なるべし

生まれた年の干支の七つ目の干支の動物が衣冠した姿を描かせてまつれば出世するという俗信があったというのである。「そのわけはしらねども」とある。とすれば、幸弘の肖像画として宝物館に伝来する「七ツ目虎之図」は、幸弘が「出世する」ために描かせた衣冠姿の虎ということになる。幸弘にとつての出世とは官位をあげることである。前に述べたように従四位下に昇進するため大金を投じいろいろな働きかけを行ったことから、幸弘にとつて官位昇進が悲願であったことがわかる。

太田南畝が「方位のむかひあふ事」と書いているように、七つ目の干支は、十二支を円に並べたときに対角線上に来る。

安永元年（一七七二）の出版の黒本『運附太郎左衛門』（作者・富川吟雪）にも七つ目の干支についての記事がある。『運附太郎左衛門』は曾我物のひとつである。内容を簡単に紹介しよう。

曾我兄弟の継父に仕える太郎兵衛が、曾我十郎と虎御前の間にできた一子（太郎左衛門）を拾って夫婦で育てていたが、太郎兵衛は主人に勘当されており貧しく、渡

世の疲れで早逝する。太郎兵衛の妻も太郎介に出生の秘密を明かして死んでしまう。太郎兵衛は正直者で、わらじを売って生活していたが、泥棒に金を恵まれるほどの貧しさだった。捨てられたときに身につけていた守り袋のなかの大黒天が夢に現れ、太郎左衛門の信心深さを憐れんで金を授ける。太郎はそのことを喜び、易者に占ってもらうと、七つ目の干支を信心するようにと**言われる**。

（易者）「ほ、ヲ よいすじじや、此横に一文字あるが升かけすじ、おしつけ幸せがよふなるぞや。こなたは午の年じや、七ツめの干支を信心すべし」

吉相の手相であるが、午年生まれなので、七つ目の干支を信心すると幸運が舞い込む、と言われて、太郎左衛門は文龍という絵師に七つ目の干支である鼠の絵を描いてもらう。

其比天朝斎文龍といふ絵師 十二の干支を書事 おびたゞしくはやりける。

太郎左衛門、七つめの干支を書いて貰ふ。

(太郎左衛門)「私は午の年でござります。どうぞ運の守りを戴きとふござります。」

それより太郎左衛門は八卦置き（注）の教へしとをり七つめの干支を求め毎日身を清め拝みけり。(太郎左衛門)「南無白鼠大明神、なにとぞ福を授け給へ。」  
「どうぞ早く金持になつて生みの親たちへかねを贈つて進ぜたい。此願成就帰命頂礼く」

やがて大黒天の遣いである白鼠から金を授かり、商売も成功して富貴となり、母虎御前に再会し孝行を尽くす。引用文にあるように「七つめの干支」への信仰がポイントの話だ。大黒天の使者・鼠を意識して七つ目の干支が「子」になるように太郎左衛門の生年を「午」としたのだろう。小池正胤は、本書の眼目は大黒天により福德がもたらされた点にあるという。<sup>(13)</sup>

正直者がいくら働いても楽にならず泥棒にまで同情される貧乏は曾我物を超えて当時の一つの実体だつ

たであろう。それゆえに大黒と白鼠の功德や運の守りも読者には説得力を持ったと思う。読者はひとしく太郎左衛門の富貴を願ったのではないか。

太郎左衛門は描いてもらつた鼠の絵を飾って祭壇を作



『運附太郎左衛門』十丁裏

つて拝んでい  
る(図参照)。  
これは、太田  
南畝が書いて  
いるような七  
つ目の干支の  
「衣冠したる  
姿」ではない。

小池がいうよ  
うに本話の眼目は、出世ではなく太郎左衛門の福德獲得にある。

つまり、七つ目の干支の祀り方として、七つ目の干支の絵そのものを画いて拝むスタイルと、七つ目の干支に衣冠させて拝むスタイルとがあり、前者は魔除けと富

貴、後者は出世を願うためのものであった。守り干支として、七つ目の干支を信仰する俗信という点で、両者は近似するが、少なくとも真田宝物館伝来の「七ツ目の寅之図」は衣冠姿の寅を描いているから、幸弘の出世<sup>14</sup>官位昇進を願ってのものだったといえる。

七つ目の干支への信仰は近代にも受け継がれている。酉年生まれの泉鏡花が七つ目の干支にあたる水晶の兎を母からもらって大切にしていたことを、鏡花の養女となつた姪の泉名月が書いている。<sup>15</sup>

鏡花の母・鈴が幼い鏡太郎に話した口調はどのようなであつたろうか。こういうふうに話したのではないかと私は思う。「鏡太郎（鏡花の本名）や、これはね、水晶の兎ですよ。鏡太郎は酉年でしよう。酉年から数えて七番目のものを持つと身のお守りになるのですよ。出世をしますよ」

鏡花の母はそういつて、鏡太郎のかわいい手のひらの上に、鏡太郎の干支から数えて七番目にあたる水晶の兎の置物をもたせてくださったのだと思う。

その母は雪積の十二月に病死した。鏡太郎は十歳の少年だった。

鏡太郎は水晶の兎を手にとって胸に抱きしめ、涙をあふれさせて母の死を悲しんだであろう。鏡太郎の涙が集まって、そこにも水晶のような兎が出来たかもしれない。

母の死後、鏡太郎は水晶の兎を見るといつも母鈴のことを思い出したであろう。母の優しい言葉を思い出したであろう。

鏡花の母は、「お守り」として、また「出世」を約束するものとして水晶の兎を鏡花に持たせたという。絵ではない。江戸時代の七つ目の干支に対する二つのスタイルへの祈りが合体されている。鏡花の母・鈴は鏡花が十歳のときに病死している。水晶の兎に込められた母の祈りは強く、鏡花にとって水晶の兎は母そのものであった。鏡花の家には兎の置物や玩具が数多く飾られていたという。祈りのかたちが三次元的に物質化され、強化されているといえる。

さらに名月は、自分も鏡花と同年の酉年生まれであるにも関わらず、兎はすべて鏡花の守護神のようであったという。

私はすぐから兎の玩具や兎の置物をもらったことがなかった。すぐは私が酉年であることを知っていたはずである。私も酉年である。鏡花と同じ癸酉年である。それなのに、すぐから兎の玩具をプレゼントされたことはなかった。

鏡花の家の中にある兎は、どこまでも鏡花の兎という感じだった。兎の置物は鏡花が亡きあとも、どこまでも鏡花の守護神というようすであった。水晶の兎というのは、母鈴と子鏡太郎との、夢のようななつかしいお話のような気がする。

七つ目の干支が鏡花と強く結びついて周囲の人間を寄せ付けられないものになっている。人形作家・辻村ジュサブローも酉年生まれで、遠足などのときは母が下着にお守り代わりに兎の刺繍をしてくれたという。たまたま二人

とも兎であるが、愛する息子への切なる祈りの具現化として、兎のかわいらしさは似つかわしい。

ところでこのような干支に対する俗信としてもっともよく知られているのは、ひのえうま丙午の女性に関するものだろう。

板橋春夫は丙午の俗信について次のように説明する。<sup>(16)</sup>

丙は「火性」なので威勢がよく、この年には火災が多いとされる。丙は陽火であり、午も陽火であるから、火に火を加えるのは良くないという説がある。また、午は「午」の連想から「元気がよい」というイメージを付与され、午年生まれの女性は男まさりであるといわれた。すなわち、この二つが重なった丙午年生まれの女性は実に元気がよく、ひいては夫を殺すなどという俗信が生まれたらしい。歴史上の人物で後世に語り継がれた千姫、八百屋お七、白木屋お駒たちは、丙午年生まれの女性であったという。こういった話題も、それを流布させることによって、根拠に乏しい俗信を本当らしくさせたのであろう。



松代藩第六代藩主真田幸弘の遊び心（平林）

「丙午」は、「丙午しつかり重荷つけて来る」「丙午遠  
ひ所から結納が来」（いずれも『誹風柳多留』）のよう  
に、しばしば川柳の題材にもなっている。

あきらかに迷信であり信ずるに足りないもののはずで  
ある。しかし、丙午信仰は近代にも根強く残っており、  
昭和四十一年（一九六六）の丙午の年は、出生率が二五  
パーセントも減少した<sup>⑬</sup>。

いつの時代でも、迷信であるにせよ災いを避けたいと  
いう思いは誰にでもある。干支の力を使って運命を好転  
させたり出世を実現したりすることが可能だと人々が信  
じていたとしても不思議はない。藩主といえども例外で  
はなかったということだろう。むしろ一国一城の主だか  
らこそ統治者として万全を期すためには必要な態度だっ  
たというべきかもしれない。

仙台市博物館では、平成二七年に歴史姉妹都市締結四  
十周年記念 特別展「宇和島伊達家の名宝——政宗長  
男・秀宗からはじまる西国の伊達——」を開催した。そこ  
に、第五代藩主伊達吉村が第四代宇和島藩主伊達村年に  
嫁いだ三女・徳子に贈った、享保九年（一七二四）の

「重ね祝い」の和歌懐紙が展示されていた。

御年かさねをいわるなりて

千世ふへき君かよはひを此のやとになれしとしるき  
鶴のもろこゑ

重ね祝いとは「厄年の二月一日に再び正月祝いをし  
て、年を余分にとつたことにする儀式<sup>⑭</sup>」であるという。

娘を思う親心に加えて、藩主の妻の安全を強く願ったも  
のだろう。世継を生むという意味で藩の命運にかかわる  
藩主の正室の厄年に災いが起きることは藩の存亡の危機  
を招きかねない。重ね祝いをすることは干支、つ  
まり暦をコントロールすることにほかならず、誰にでも  
できるものではない。

藩主は仁政によって藩の未来を作っていく立場にあ  
る。そのためには藩主及びその妻子は無病息災でなけれ  
ばならない。暦をコントロールしてまでも、厄年の辟邪を  
行う必要があっただろう。

宇和島伊達家での厄年回避のための重ね祝いと幸弘の

「七ツ目之虎図」には、年回りを意識した行為という共通点がある。

厄年は身体的社会的変節点にさしかかったときの注意喚起を促すものでもある。男の大厄は四二歳である。その前後の年を前厄、後厄という。幸弘四二歳の大厄は天明元年（一七八一）である。前にも述べたように幸弘は天明三年（一七八三）に官位昇進を果たしている。幸弘はいづごろ官位昇進を思い立ち、そのための準備にどれほどの年月をかけたのだろうか。現実的な対処だけではなく、神仏や先祖代々の御霊に祈ることも当然行ったはずである。天明二年は寅年である。寅は幸弘の七ツ目の干支にあたる。これらを考え合わせると、この頃、厄年の辟邪とともに、寅年に虎の衣冠図を画かせて官位昇進を願ったということがあったのかもしれない。

陰陽道では十二支にも十干にも陰と陽、木火土金水の五大元素をあてはめて運氣を読み取ることが行われていたから、干支に対する人々の思い入れは単なる俗信・迷信という以上に、何らかの統計学的な経験値に基づく信念に基づいていると思われる。

諸橋轍次は「今年は何年だから恵方はどちらだとか、移転にはどの地からどの地へは<sup>かたが</sup>方違が必要だなどいい、何の理由もなくただ人の常の心を乱すばかり」、「干支が人の運命に関するという迷信」と批判するが、それはとりもなおさず干支にこだわる人々が昔から多いということとの裏返しだろう。信じる心が原因なのかもしれないが、経験的に干支の吉凶を信じこまざるをえない出来事が多く降りかかってきたということもあるかもしれない。また、自らの不幸の原因を年回りの悪さに見いだすことで、降りかかった不幸を甘受し、仕切り直して新しい一歩を踏み出す原動力にしようという心性もありそうだ。「亥年生まれなので猪突猛進」「酉年生まれなので落ち着きがない」というものいいは誰しもすることがある。干支への思いは日本人の世界観と不即不離のところにある。

さらに日本人が時間と空間のスケールとして、年・月・日・時刻・方位に干支を用いてきたことを考えると、藩の歴史（時間）と領地（空間）を司る藩主が干支にこだわるのも当然のことといえる。宮田登によると、各藩にはお抱えの「日和見」<sup>ひよりみ</sup>がいたという。<sup>(20)</sup> 彼らは、天

文学や易学を学んだわけではなく、多年の経験から生じた勘にたよった日和見を行ったという。そして、このような「日和見」王的な存在が、地域社会の秩序を維持していたと指摘する。「日和見」王が、暦を作り、時間を管理する存在だとするなら、「日和見」は、藩主の領地・領民支配に重要な存在だっただろう。俗信であるにせよ藩主の栄光に影を落とすものは徹底的に排除されたに違いない。そのように考えると、重ね祝をしたり、虎頭の肖像画を画かせて祀ったりすることは、時の管理者である藩主にはじめて可能なものだったともいえる。

## 五 虎について

諸橋轍次は、虎について次のようにいう。<sup>(21)</sup>

中国でも虎は陽物だといわれていて、元来、七の数を陽気と考えていることから、虎は胎内にあること七か月にして生まれ、首から尾までの長は七尺（一

尺は日本の八寸）だなどといわれています。これはコジツケにきまっていますが、虎が陽物であることにはまちがいはない。

七つ目の干支がたまたま「寅」であつたにせよ、鼠や蛇ではなく虎図であることの意味は大きい。虎だからこそユーモラスななかに藩主としての威厳を感じさせる絵なのである。

芦田正次郎は「虎」に関する次のような習俗を紹介する。<sup>(22)</sup>

虎は額に王字の紋があるといわれ、虎頭王と呼ばれるで、子供の帽子や靴の正面に虎の顔を縫いつけ、その額に横三本のしわを描き、さらにその中心に縦の一本の線を入れ「王」の字にしたという。

吉野裕子は、「寅」は五行（木火土金水）のなかで「木気の始め」に相当し、しかも五行のなかで、生命があり形があるものは木気だけなので、寅には「生まれ出るもの、動き始めるもの、顕現するもの」という本性が

あるという<sup>(23)</sup>。吉野は、年頭の呪物として張り子の虎を飾ったり、高貴な新生児の魔除けとして虎の頭を産湯に浸したりした例を紹介する。



信貴山朝護孫寺境内入口付近の巨大な張り子

信貴山朝護孫子寺には、寅の年の寅の月の寅の日に聖徳太子の前に毘沙門天が出現し、崇仏派の蘇我氏が廃仏派の物部氏に勝利したという伝承がある。毎月寅の日を縁日とし、寅の月（二月）に毘沙門天の御開帳を行う。松永久秀の築城の地でもあり、多くの武将が戦勝祈願をしている。

磯野直秀『日本博物誌年表』<sup>(24)</sup>によると、文献に記述さ

れた虎の記事としてもっとも古いものは『日本書紀』欽明朝のものである。「膳臣<sup>かしわで</sup>の巴提使<sup>はすひ</sup>」は壱岐守家行の郎等であったが、罪を得て親子三人新羅に逃げのびる。と

ころが一子を虎に食い殺されてしまい、その敵の虎を射とめて日本に虎皮を持ち帰り罪を許される。その後、中国との貿易や、秀吉の朝鮮出兵、また、江戸時代に入ってから朝鮮通信使の来日に際して、生け捕りの虎や虎の皮が日本にはいつてきていている。日本人がしばしば虎を目にする機会があった。虎はまぎれもなく武門の為政者の權威を象徴するものであった。

一月は寅の月である。吉野裕子によると「正月は木気の初めの寅月、色は青、易の卦は『地天泰』、万象和合の時である」という。<sup>(25)</sup>「七ツ目之虎図」が、天明二年（二七八二）寅年の寅月に画かれたと夢想するなら、寅年・寅月・七ツ目の寅を重ねる祝意も読みとることができる。

## 六 七について

では、「七つ目の干支」はなぜ七つ目なのだろうか。近年は、七つ目の干支が、十二支を時計状に並べたときに対角線上に来ることから「向かい干支」（裏干支・逆

さ干支」といった言い方もされる。しかし、「七つ目」という言い方が本来の言い方である以上、「七」という数字に何らかの意味があるのかもしれない。

宮田登は、七という数字の聖性について、中国・朝鮮からの影響で、いろいろな側面で生活に根付いているとする<sup>(26)</sup>。

七については、中国・朝鮮と同様に聖数の一つとみなされていた。もちろん漢字による七曜とか七賢、七難、七仏、といった語が広く受容されたこともあったが、本来通過儀礼においては七歳がきわめて重視されていたことは、七つ子の祝などにみるように、七歳の子どもがちやうど大人の段階に入る境界とされていたことはたしかである。七つの子どもの成長を村の氏神に祈願する。それも収穫祭の秋祭りの折に行うのが、七歳を中心とした七五三の儀礼であり、わざわざ年齢を特定している点に、数に対する隠れた心意がうかがえるのである。とりわけ七歳については、その習俗は豊かである。たとえばナナ

トコイワイは、七所祝と記し、南九州一体で行われている。七歳の子が一月七日に、近隣七軒を各自お盆を持ってまわり、各家から雑炊をもらい集めて食べる。そうすると幸運に恵まれるといったたり、病氣にかからないという。この場合も七の数にこだわっている。七軒の家から布をもらって着物を作るというのは、佐渡島の事例である。七軒の家からいろいろな物を貰うのは、活力を七つの子に付加させるためとしている。

聖書の創世記でも七日目を安息日とするが、仏教でも死者の霊をあゝの世へ送り出す際に七日を一区切りとして様々な儀式を七七（＝四九）日まで続ける。「七日目」について宮田は次のように説明する<sup>(27)</sup>。

かつて他所へ出かけて行って七日目に帰宅するところを忌むという習慣があった。帰宅が七日目にたまたまなってしまうと、すぐに家に入らないで、村内の別の家に一泊してから戻ったりした。七日目に帰

ると人が死ぬとまでいっており、ラッキー・セブンならぬ悪日なのである。おそらく初七日などの仏事に関わる数字とみているためであろう。

七月の七日目は七月七日であり、七日盆の名称があった。井戸や池をさらってきれいにするのはもちろん、墓掃除、金物みがきなどをする。女性もこの日に髪を洗うとよいとしていた。山口県吉敷郡下では、この日、七回親を拝み、七回海に入ってみそぎをする。そして七回仏を拝み、七回飯を食べるものだという口碑が残っていた。つまるところ精進潔斎して両親と先祖に仕えることをいつているが、とくに水を使って祓い浄めることが七月七日に課せられていたことがわかる。

キリスト教徒は、キリストが一日に処刑されたことから、数字の二三を嫌う。日本人は、「死」の音に通じることから四という数字を忌む。俗信とはいえ、ホテルの部屋番号や飛行機の座席などは配慮されている。数字へのこだわりには、干支に対するこだわりと同じように

根強いものがある。

宮本袈裟雄は、誕生儀礼や葬送儀礼に「七」という数字に関係するものが多いのは、七にこの世とあの世の区切りを象徴する意味があるからではないかと説明する。<sup>(28)</sup>

そのため「赤児に付与された靈魂を一層強固にするための儀礼」あるいは「死後の儀礼は肉体から分離した靈魂をあの世に送り安定させるための儀礼」として、七に関する儀礼が重要な意味をもったのではないかと推論する。

さらに、宮本は、平安時代の七月七日の七夕における「乞巧奠<sup>きこうでん</sup>の習俗」に言及する。南北朝の頃より「七遊び」が行われるようになったという。七百首の詩歌を作ったり、七調子の管弦を行ったりする遊びである。乞巧奠<sup>きこうでん</sup>は織女にちなんで機織りなどの手仕事の上達を祈願する儀式であったが、短冊に歌を書くことから詩歌管弦の遊びをする神遊びの要素が強まった。また、宮本は、七福神信仰が成立する室町時代には、名数遊びが流行し、「古代人がもっていた神と人とを繋ぎ畏怖を含んだ呪術数の観念が喪失」する一方で、「遊びの要素」が加わることによって、「聖数七の観念が一層強められたとみるべき

ではなからうか」とする。遊びの要素が強まることで、呪術性は弱まり聖性が強まるというのは一見矛盾するような考え方である。しかし、「遊びの要素」を晴（ハレ）の「神遊び」と考えるならば、日常的な労働（褻・ケガレ）に対立するという意味で、聖性が高まり、個人的日常的な呪術性からは遠ざかるというのは自然な流れだ。七という数字に神遊びの要素が入り込むことによつて、個人レベルの生死に関する禁忌を避けるという意味合いから、より普遍的な祈りの意味合いが強まったということだろう。

新谷尚紀は、「遊び」に関するホイジンガ、カイヨワ、柳田国男、折口信夫の見解を検証したうえで、「遊び」は「無秩序で狂乱的で呪的な力に満ちた、いわば社会からの一時的離脱の行為であり、神祭りの中心に位置する」と結論づける。<sup>(29)</sup>「遊び」は「人々が危機に直面したときに突発的に行われるものである」という。真田家にあてはめて考えるならば、嫡子不在という危機を乗り越え、官位昇進という非日常的な祈りを達成するために行われた聖なる遊びとして七つ目の寅の衣冠図が祀られ

たという解釈も成り立つ。

考えてみれば、七という数字の聖性に限らず、すべての聖なる言動は、遊びの要素の有無によって、個人の幸福を祈るものと不特定多数の幸福を祈るものに分かれる。しかし、個人の幸いを祈ることと国土全体の安全と厄災忌避を祈ることとはひとつのことでもある。

真田宝物館の虎図を改めて見直してみよう。この絵からは恐ろしさや不気味さは伝わってこない。むしろ、思わず笑みがこぼれるような絵である。何か心の余裕のようなものさえ感じさせる。

幸弘がこの絵にどんな思いをこめたのか、ほんとうのことはわからない。官位昇進の願いがあった可能性もある。子のない養子幸専の世継ぎ問題の解決を願い、真田家の繁栄を祈ったのだろうか。単純に自身の無病息災を祈ったのかもしれない。そのすべてかもしれないし、どれでもないかもしれない。自分の干支に関するものであるから、和歌・俳諧の道を究めることができるようにと祈った正当性は感じられないし、豊作や領内の救済を祈るといった公の祈りでもないだろう。しかし、幸弘は藩

主である。為政者である以上、自分の身の幸せを祈ることとは聖なる行為となる。真田家の栄光を祈ることにつながるし、そのことは領地・領民の豊かさに結びついている。

E・ルモワーヌ・ルッチオーニは、人間と衣服の関係について、「衣裳をつけること、衣裳で身を覆うこと、これは顔にコミュニケーションの優位を譲ることである」という。<sup>(30)</sup>ルッチオーニによると、「人間は根本的に顔で話す」ので、仮面をつけることによって、「身体は再びコミュニケーションの道具になる」という。つまり、仮面は、衣装と同様に、新しい顔を獲得することを可能とする。そこに、なりたい自己や、普段は潜在化している自己を仮託することができるのだ。この虎図には、虎という王者を象徴する仮面に衣冠束帯という権威を象徴する衣服が重ねられている。そして、虎が正装をするという非現実性が、自由な遊び心を伝える。

われわれにはこの絵しか残されていない。いつものような思いを込めて画かせたかのは永遠の謎である。しかし、この絵は実に多くのことを語りかける。為政者にし

かできない遊び心のある絵であり、為政者ならではの祈りが込められている。しかも干支に関する俗信の表象なのである。聖なるものと俗なるものとが統合されている。領内に対して文武鍛錬・質素儉約を解く一方で、俳諧や和歌の宗匠・師匠と遊芸に興じた幸弘ならではのものといえよう。



【注】

- (1) 『日本国語大辞典』 第二版 第十卷 (小学館、二〇〇一年一〇月)。
- (2) 『日暮硯』の伝本は多いが、ここではすべての引用は信濃『北信郷土叢書』巻八(北信郷土叢書刊行会、一九三五年四月)に翻刻掲載の『鳥籠の山彦』(真田宝物館所蔵)のテキストによる。読解の便宜をはかり読点・送り仮名を補ったところがある。
- (3) 以下引用はすべて、国文学研究資料館史料館編『松代藩庁と記録 松代藩「日記繰出」』(名著出版、一九九八年三月)による。
- (4) 笠井助治『近世藩校に於ける学統学派の研究』上(吉川広文館、一九六九年四三月)による。南陽に学んだ松代藩士に岡野石城、鎌原桐山がいる。石城は、はじめ朱子学を学ぶが、のちに徂徠学派となり、藩の稽古所や私塾翠篁館で教えた。文政一三年日八六歳で死去している。桐山は、幸弘・幸専・幸貫の三代に家老として仕えた。一七七四(安永三)と一八五二(嘉永五)。学問を好み、岡野石城や長国寺住職千丈実巖に学び、江戸では佐藤一斎に教えを請うた。武技や点茶、横笛にも通じ、私塾朝陽館を開いた。朝陽館では佐久間象山や山寺常山も学んだ(『長野県歴史人物大事典』郷土出版社、一九八九年七月による)。
- (5) ヘンポジウム藩主の交遊―和歌・俳諧がむすぶ人と地域― 基調講演「酒井忠徳の俳諧と思想」二〇一四年七月二五日・於鶴岡市致道博物館、〈真田幸弘二百回忌講演会〉「名君真田幸弘公と俳諧」(二〇一四年九月二七日、於・長野市松代公民館)。
- (6) 井上敏幸「真田幸弘の俳諧―真田幸弘の俳諧資料―」『近世中・行為松代藩真田家代々の和歌・俳諧・漢詩文及び諸芸に関する研究』論文篇・資料篇 第一部、二〇〇二年三月)、伊藤善隆「真田幸弘と大名俳諧」(真田宝物館展示図録『文人大名真田幸弘とその時代』二〇一二・九)、拙稿「松代藩主・真田幸弘の文芸活動―和歌と俳諧―」(錦仁編『中世詩歌の本質と連関、二〇一二・五、竹林舎)、松代藩第六代藩主真田幸弘の点取俳諧活動について―安永年間を中心として―(『松代』第二四号、二〇一〇年三月)等参照。
- (7) たとえば、俳諧を通じて幸弘と親しかった熊本藩第六代藩主細川重賢も、「宝暦の改革」を断行し、中興の祖と言われる。堀平田左衛門勝名を家老に登用し、官僚機構を整備し、奉行の職務を明確化して行政と司法を分離させたほか、倭約令を発布し、藩校時習館を設置した。福岡藩の儒医亀井南冥は熊本を訪れて細川重賢の宝暦の改革に共鳴し、福岡藩主黒田治之に宝暦の改革の概要を知らせるべく『肥後物語(熊本俚談)』を執筆して提出した。同書は真田家にも伝来する。
- (8) 『花月日記』本文の引用は、木村三四吾編校『花月日記文化九年・十年』(一九八六・三、八木書店)による。
- (9) 引用は岩波文庫『宇下人言・言行録』(一九四二年六

月) 所収の本文による。

(10) 前掲池(6)の井上論文。

(11) 引用は、日本随筆大成別巻3『一話一言』(吉川弘文館、一九九六年七月新装版) 所収の本文による。

(12) 引用は、小池正胤・叢の会編初期草双紙集成『江戸の絵本』IV(国書刊行会、一九八九年六月) 所収の翻刻による。

(13) 同右「解説」(小池正胤執筆)。

(14) 近松半二『東海道七艇梁』(安永四年(一七七五)にも、「我君は卯の御年、七ツ目は鳥なれば、是を御寵愛なさるゝは御運の守、一家中の者共も、銘々の年に寄て、各七ツ目が異れ共、残らず鳥を紋に付るも、偏(ひとへ)に御前の御恵に、帰服仕る故の事」(帝國文庫水谷弓彦校訂『近松半二浄瑠璃集』博文館、一八九九年四月)と書かれる。家臣たちが、自分の干支の七ツ目を無視して、殿の干支の七ツ目の紋を付けて殿の運勢を守ろうとしている場面である。

(15) 泉名月「鏡花と兎」(『鏡花幻想譚』2 海異記の巻) 河出書房新社、一九九五年五月

(16) 板橋春夫『誕生と死の民俗学』(吉川弘文館、二〇〇七年八月)。

(17) 昭和四一年(一九六六)は丙午年の出生数は一三六万九七四人、前年が一八二万三六九七人、翌年が一九三万五六四七人であるから、激減といえる。板橋は、前掲書で、厚生省(当時)が人口減の原因を「ひのえうま」の

影響としてしていること(『厚生指標』一九九七年)に言及する。また、群馬県勢多郡粕川村母子健康センターでは丙午俗信追放キャンペーンを展開したにもかかわらず、昭和四一年の出生率が前年度比六割にまで落ち込んだという。丙午俗信の影響力がいかに大きかったかわかる。

(18) 同展覧会図録(仙台市博物館、二〇一五・一〇月)。

(19) 諸橋轍次『十二支物語』(大修館書店、一九六八年一月)。引用は、諸橋轍次著作集第九卷(一九七五年九月、大修館書店)による。

(20) 宮田登『日本を語る 王権と日和見』(吉川弘文館、二〇〇六年一月)。

(21) 前掲注(19)に同じ。

(22) 芦田正次郎『動物信仰事典』(北辰堂・二〇〇九年四月)。

(23) 吉野裕子『十二支』(人文書院、一九九四年七月)。

(24) 磯野直秀『日本博物誌年表』(平凡社、二〇〇二年六月) 掲載の主な虎関連記事は次のとおり。

五四五 欽明六 ●十一月 膳臣巴提便が百濟から虎の皮を持ち帰る(書記)。

六八六 朱鳥一 ●四月十九日 新羅の貢物が筑紫より届く。そのなかに馬一・騾(ラバ)一・犬二・虎皮・豹皮および薬物の類があった(書記)。

一五七五 天正三三 ●明船、豊後国臼杵に來航、虎四・象一・孔雀・鸚鵡・麝香などを持ち渡る(長崎年曆両面観)。

松代藩第六代藩主真田幸弘の遊び心（平林）

一五九三 文禄二 ● 二月二十一日、亀井武藏守新十郎、稀にみる大虎を朝鮮でしとめる。秀吉に贈られた皮は、天皇も御覧になる（寛政家譜）。

一五九四 文禄三 ● 十二月、吉川広家きくわひろいえが朝鮮より秀吉に生虎を送る（史料綜覧）。

一六〇二 慶長七 ● 六月二十八日、交趾（コーチ、現ベトナム北部）船が長崎に着いたとの知らせが、この日江戸に届く。家康への献上品のなかに象一・虎一・孔雀二があり、虎は長崎に留め置き、そのほかは上京させる（通航一覧一七一）。 ● 八月十日、家康は、前項の象を豊臣秀頼に贈った（史料綜覧）。のち、虎も進呈したらしい。

一七一九 享保四 ● 十月一日、吉宗、朝鮮国使節（通信使）を引見。朝鮮からの進物中に、人参五〇斤・虎皮一五張・豹皮二〇張・魚皮一〇〇張・鷹子二〇連・鞍馬二疋がある（実紀）。

(25) 吉野裕子『五行循環』（人文書院、一九九二年三月）。

(26) 宮田登『日本を語る 俗信の世界』（吉川弘文館、二〇〇六年五月）。

(27) 同右。

(28) 宮本袈裟雄『庶民信仰と現世利益』（東京堂出版、二〇〇三年九月）。

(29) 新谷尚紀『ケガレからカミへ』（岩田書院、一九九七年二月）。

(30) E・ルモワ・ヌールツチオーニ『衣服の精神分析』（産

業図書、一九九三年五月）。

\* 本稿は、盛岡大学日本文学会平成二七年度春季大会（二〇一五年五月三〇日）に盛岡大学で「大名の和歌と俳諧―松代藩主真田幸弘―」と題してお話させていただいた内容を元にしている。資料の閲覧・掲載に際して、長野市文化財等管理事務所（真田宝物館）のご高配を得た。同館学芸員山中さゆり氏にはいろいろとご教示を賜った。盛岡大学の関係者の方々、真田宝物館、山中氏に心から感謝申し上げます。また、本稿は、科学研究費補助金基盤研究（C）「松代・一関・南部・秋田各藩の和歌活動・俳諧活動による大名文化圏形成の新研究」（二〇一三年―二〇一五年度・研究代表平林香織）の成果によるものでもある。